

語末に“~more/most”の付く英語の形容詞・副詞

—この特殊型の派生理由を探る—

大 高 博 美

I. 本研究の目的

英語の比較用法においては、迂言比較（例：more beautiful/most beautiful）と屈折比較（例：harder/hardest）のどちらでもなく、例外的に“more/most”が形容詞・副詞の後ろに現れる場合がある（例：furthermore, northernmost）。語彙数の観点から言えば、後に示す通り（表1）、比較級を示す語彙が6語程度であるのに対し、最上級を示す語彙は44語であるから（表2）、生産性において両者には大きな差が見られる。

本研究では次の二つの疑問に焦点を当てる。一つは、上述の英文法上極めて特殊な比較形が何故に生じたのか、そして二つ目は“~more”と“~most”の語彙数上の差が何故に生じているのか、の二点である。具体的には、次のような仮説を提唱し、その真偽を、音声実験を通して検証する。

II. 仮説

“more”と“most”が原級形容詞・副詞の前に置かれると（迂言的句比較）、発話時におけるプロミネンスが後続の強勢音節と同程度に大きくなるために、これらの間でリズムの衝突（rhythm clash）が起こる（例：móre fúrther, móst nórthern）。よって、これを避けるために“more”と“most”は語末に移動したのではないかと考えられる。実際、a hálf hóur や a quáite jób という定型的な表現は、現代英語ではそれぞれ hálf an hóur, quáite a jób でも文法的とみなされるようになってきている。また、語彙数上で“~more”と“~most”間に大きな差が見られるのは、恐らく、最上級の意味を伝える後者の方が単なる比較の意味を伝える前者よりも発話時におけるプロミネンスを大きくするのではないかと思われるからである。尚、前者の仮説の理論的根拠は、研究の対象となる形容詞・副詞のほとんどが語根の第一音節に強勢をもつという事実に基づいている（表2での例外は“forévermore”と“northwésternmost”のみ）。

表1：“more”が右端に付く形容詞／副詞（『英語逆引き辞典』1999: 小学館から）

Anymóre Evermóre Forévermore¹⁾ (c.f. for évermore とも表記)
 Fúrthermore/furthermóre (第1音節にアクセントのある型もある。)
 Névermore/nevermóre (第1音節にアクセントのある型もある。)
 *Innermore (この語彙は辞書によっては掲載がないものである。)
 C.f. claymore, dulcimore, hackamore, sagamore, sophomore, sycamore,
sycomore (ここでの7語は表面的には上の6語と同型を取るが、意味的
 に比較級とは何等関係のない名詞である。)

表2：“most”が右端に付く形容詞・副詞（アクセントは1語を除いてすべて語頭）

Aftermost	Hindmost	Rearmost
Aftmost	Hithermost	Rightmost
Backmost	Inmost	Southernmost
Bettermost	Innermost	Sternmost
Bottommost	Lattermost	Topmost
Centermost	Leftmost	Undermost
Downmost	Lowermost	Upmost
Easternmost	Middlemost	Uppermost
Eastmost	Midmost	Utmost
Endmost	Nethermost	Uppermost
Farthermost	Northernmost	Utmost
Foremost	Northmost	Uttermost
Furthermost	Northwesternmost	Weathermost
Headmost	Outermost	westmost
Hindermost	Outmost	

ここで特筆すべきは、このタイプの最上級形容詞／副詞は主に位置・時・順序を示す形容詞・副詞・名詞の語尾に付くのだが、原級もしくは比較級のどちらか（もしくは両方）を欠いている場合が多いということである。下の表では、存在しないものを記号φで示してある。よって、このタイプの比較形は、文法上さほど体系化されてはいないと言えよう。

表3：Mostで終わる形容詞・副詞の原級・比較級の例

現級	—	比較級	—	最上級
φ		inner		inmost, innermost
φ		(utter)		utmost, uttermost
φ		φ		endmost
top		φ		topmost
fur		φ		furthermost
north		φ		northmost, northernmost

1) ただし、forévermoreが、for évermoreと分かち書きされる場合もあることと、northwesternmostが唯一4音節語となるためにストレスシフトが起こるという点を考慮すると、真の例外とは言えず、ここでの想定を何等弱めるものではない。

Ⅲ. 研究方法

上述の仮説の真偽を検証するために、英語母語話者を被験者にして、次の3種の more/most 関連表現（比較／最上級）を文の中で発話してもらった。そしてその後は音声分析ソフトウェアの Praat を使って“more/most”と後続形容詞の第一強勢のデシベル値（dB）を音響学的に分析・比較した。

1. more/most + 第1音節に強勢をもつ形容詞（more/most likely, dangerous）
2. more/most + 第1音節に強勢をもたない形容詞（more/most intelligent）
3. more/most + 第1音節に強勢をもつ形容詞 + 名詞（more/most foolish idea, dangerous word）
4. more/most + 第1音節に強勢をもたない形容詞 + 名詞（more/most condensed version）

実験材料（12文）

more/most + 形容詞

1. Bruce is more likely to visit us tomorrow.
2. Jane is most likely to visit us tomorrow.
3. It'll be more dangerous to say such a thing to him.
4. It'll be the most dangerous to say such a thing to him.
5. Dogs may be more intelligent than cats.
6. Cats may be the most intelligent out of the three kinds of pet animals.

more/most + 形容詞 + 名詞

7. You have just expressed a more foolish idea to me.
8. You have just expressed the most foolish idea to me.
9. Give me a more dangerous word to address to him.
10. Give me the most dangerous word to address to him.
11. That drama is a more condensed version of a novel than this one.
12. Out of the three dramas, that is the most condensed version of a novel.

被験者

本実験には、2016年に関西学院大学に1年間交換留学として来日していた英語母語話者の男女学生6名が参加した（全員20歳代前半）。彼らの名前（ファーストネーム）の頭文字と国籍および性別は下の通りである。Sで始まる名前が二人いるのでそれぞれS1、S2として区別することにする。

- R (USA Female)
- M (British Female)
- J (USA Male)
- S1 (USA Female)
- D (USA Male)
- S2 (USA Male)

IV. 実験の手順

繰り返すが、本研究における前述の仮説は、形容詞・副詞の“more/most”が文中で使われるとき意味的に新情報の一端を担うことになるために、そのプロミネンス（高さ・強さ）は後続の内容語と同程度に高くなるであろうという想定に基づいている。よって、録音に際しては、被験者は先の12の例文をただ順に棒読みするのではなく、まず1文ずつ内容を理解した上で全体を記憶し、その直後に文字を見ずに一つずつマイクロフォンに向かって再生してもらった。こうすることにより、他人によって作成された文の再生ではあるものの、音声的にはより自然な発話に近づいたものと思われる。

実験結果：more/most と後続音節の dB 比較

表4：上掲の例文1～4

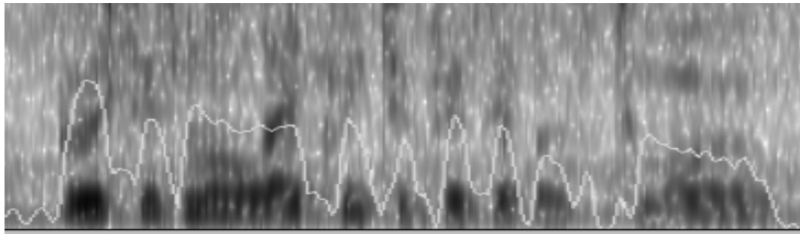
Informants	more	likely	most	likely	more	dangerous	most	dangerous
R	68	66	68	64	68	66	68	64
J	70	70	71	70	73	73	72	71
S1	76	74	76	68	77	77	75	73
M	70	67	72	66	73	71	72	69
D	74	74	74	73	74	74	72	73
S2	74	74	79	75	77	77	74	74
平均	72.0	70.8	73.3	69.3	73.7	73.0	72.2	70.6

表5：上掲の例文5～8

Informants	more	Intel- ligent	most	Intel- ligent	more	foolish idea	most	foolish idea
R	65	63	66	62	64	66	70	65
J	70	72	73	70	75	75	72	72
S1	73	68	69	69	72	74	72	73
M	68	67	67	66	64	68	70	67
D	69	68	73	70	72	72	71	74
S2	73	73	74	73	75	74	78	72
平均	69.6	68.5	70.3	68.3	70.3	71.5	72.2	70.5

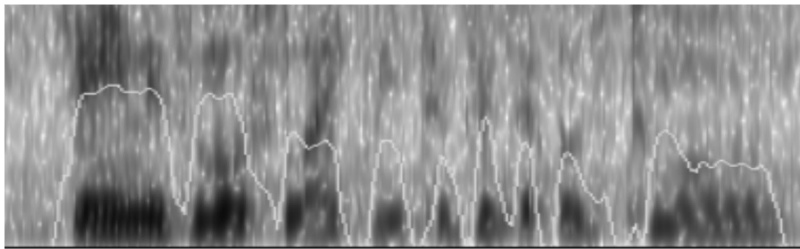
表6：上掲の例文9～12

Informants	<u>more</u>	<u>dangerous</u> word	<u>most</u>	<u>dangerous</u> word	<u>more</u>	<u>condensed</u> version	<u>most</u>	<u>condensed</u> version
R	67	64	69	65	67	67	64	63
J	71	73	72	71	73	73	73	72
S1	74	72	71	71	73	74	70	71
M	67	70	72	70	70	70	70	67
D	72	70	72	70	72	70	72	70
S2	79	77	79	75	75	76	72	75
平均	71.6	71.0	72.5	70.3	71.7	71.6	70.2	69.6



Bruce is more like--- ly to vi- -- sit us to----morrow.

図1：例文1のソナグラム上のdB変化 (more likely)



Jane is most like -- ly to vi — sit us to--morrow.

図2：例文2のソナグラム上のdB変化 (most likely)

V. 実験結果の分析

先掲の例文1から12のデシベル値に基づくデータを分析して、次の3点が分かった。まず、more/most は、後続の強勢音節と同等か少し高い値で生成されるということである（例外は“more foolish idea”のみ：more foolish idea ⇒ 70.3 : 71.5 dB, c.f. most foolish idea ⇒ 72.2 : 70.5 dB）。よって、予想通り、“more/most”は意味的にプロミネンスを得やすい形容詞と言えよう。ただ、何故“more foolish idea”では例外的な結果となったのかは判然としない。これは、被験者の多くが形容詞の“more”よりも後続の名詞句“foolish idea”に比較的強めのプロミネンスを置いたからなのだが、一体それは何故なのだろうか。

次に判明したのは、予想通り、“more”は“most”よりもやや弱く生成される傾向があるという結果である。分かりやすいように、下に“more/most”と後続強勢音節の間のデシベル差（右端の数字）を示す。

more/most + 形容詞（語頭に強勢）

more likely=72.0 : 70.8 → 1.8 < most likely=73.3 : 69.3 → 4.0

more dāngerous=73.7 : 73.0 → 0.7 < most dāngerous=72.3 : 70.6 → 1.7

more/most + 形容詞（語頭から2番目の音節に強勢）

more intélligent=69.6 : 68.5 → 1.1 < most intélligent=70.3 : 68.3 → 2.0

more/most + 形容詞（語頭に強勢） + 名詞

more fóolish idea=70.3 : 71.5 → -1.2 < most fóolish idea=72.2 : 70.5 → 1.7

more dāngerous word=71.6 : 71.0 → 0.6 < most dāngerous word=72.5 : 70.3 → 2.2

more/most + 形容詞（語頭から2番目の音節に強勢） + 名詞

more condénsed version=71.7 : 71.6 → 0.1

most condénsed version=70.2 : 69.6 → 0.6

そしてもう一つ、三つ目に判明したことは、“more/most”は、形容詞のみに後続されるときよりも形容詞と名詞から成る名詞句に後続されるときの方が全体として弱く生成される傾向にあるということである（上掲の図1と図2のソナグラムを参照）。分かりやすいように、前掲のデータを基に両ケースのdB差の平均を比べたものを下に示す。

形容詞の前の more/most の平均 : 5.6dB（ more が 3.6dB, most が 7.7dB） >

形容詞 + 名詞の前の more/most の平均 : 2.0dB（ more が -0.5dB, most が 4.5dB）

上の結果が何故なのかについては、残念だが、これも判然としない。ただ可能性の一つとして、“more/most”に2語の内容語（形容詞 + 名詞）が続くと、プロミネンスを置く選択肢が、単に形容詞が続くときよりも、増えるからという理由が挙げられるかもしれない。

VI. 考察

以上の分析結果から、冒頭で掲げた仮説（「“more/most”は強勢において、プロミネンスを帯びることの多い内容語（形容詞・名詞）の強勢音節と同程度に強いので、語頭に第一強勢をもつ語に後続されると両者間でリズムの衝突が起こる。そしてこれを避けるために、ある種の語彙において語末に“more/most”が移動した」）は、可能性としてありうると主張できる。繰り返すが、“more/most”は後続の形容詞と同程度かそれ以上のプロミネンスが与えられる傾向にあるということが判明したからである。つまり、これらは意味的に重要な役割を担っている内容語なのである。しかし、もう一つの仮説（「“～more”と“～most”を語末にもつ形容詞・副詞の間に語彙数上で大きな差が見られるのは、後者の方が発話時におけるプロミネンスが前者よりも大きいからである」）は否定された。何故なら、“more”と“most”間のデシベル値上の差はそれほど大きなものではないということが判明したからである（“more”と“most”の平均デシベル値はそれぞれ71.4と71.8であった）。人間の聴覚が2音間に強さの違いを知覚できるのは通常3デシベル以上の差があるときであるとされる（『新版 日本語教育辞典』1999年 大修館書店 p.32）ので、0.4dBの差（71.8-71.4=0.4）では無視できるレベルの差でしかないということになる。

VII. “～more/most”を右端にもつ語の派生経緯—歴史的・意味的な観点からの考察

では、“nevermore”や“furthermore”のように“more”を語末にもつ形容詞・副詞の語彙数が“northernmost”や“outermost”のように“most”を語末にもつ形容詞・副詞より有意に少ないのは、一体何故なのだろうか。本節より以下では音声学的な視点から離れ、別の視点、つまり歴史的・意味的な観点からこの問題を取り扱う。

英語の形容詞・副詞には比較級/最上級があることは知られているが、宇賀治（2000）によると、その起源は古英語（OE）、さらにはゲルマン祖語にまで遡ることができ、OE期における形容詞・副詞の比較は、文法上、接尾辞（もしくは屈折）比較（～er/～est）のみであった。その後、中英語期（ME: 1066年～1500年）に入り、ラテン語・フランス語の影響を受けて²⁾ 迂言的句比較（more ～/most ～）も文法中に現れた。尚、迂言的句比較が増加し始めたのは14世紀からで、比較語も more と most に限定された。この比較の型は ModE 期に入ってさらに拡大し、接尾辞比較を凌ぐまでになった。

2) よく知られているように、1066年に当時のフランス北部を治めていたノルマンディー公ウィリアム（征服王）がブリテン島を支配し、その後300年ほどフランス語が英語に影響を与えた。英語に句比較が生まれたのは、このような事情があったからである。

7.1 接尾辞比較

接尾辞比較 (inflectional comparison) とは、語幹に接尾辞を付加して比較級 / 最上級がつくられるもので、接尾辞は比較級が “-ra”、最上級が “-ost” であった。

例 : fæger (‘fair’) - fægerra - fægerost

hālig (‘holy’) - hāligra - hāligost

rīce (‘powerful’) - rīcra - rīcost

lēof (‘dear’) - lēofra - lēofost

また、ゲルマン祖語に遡る接尾辞 “-ira”, “-ist” を取る形容詞もあり、OE 以前にこれらの接尾辞が形容詞語幹に i-ウムラウトを引き起こした。その結果形が OE に現れているのが以下の形容詞で、そこでの接尾辞は “-ra”, “-est” となる。

例 : brād (‘broad’) - brædra - brædest

eald (‘old’) - ieldra - ieldest

grēat (‘great’) - grīetra - grīetest

long (‘long’) - lengra - longest

これらに属さないものが不規則比較で、原級とは異なる語幹に比較接尾辞を付加して比較級 / 最上級がつくられた。これが、いわゆる補完法 (suppletion) で、以下の4語がある。

gōd - betra - betst (good - better - best)

yfel - wyrsa - wyrst (evil - worse - worst)

lýtēl - læssa - læst (little - less - least)

micel - mǣra - mǣst (much - more - most)

このうち、“yfel” は現代英語 (PE) では “evil” となったが、PE における比較は “eviler” - “evilest” であり、“worse” - “worst” は “bad”, “ill” の比較形であると解されている。

7.2 迂言的句比較

迂言的句比較 (periphrastic/syntactic comparison) とは、接尾辞の付加によらず、“more”, “most” を用いて比較級 / 最上級をつくるもので、Mitchell (1985) によると13世紀の ME 期に形成された。ラテン語そしてその流れを汲むフランス語からの影響と思われる (Kytō 1996a, Mustanoja 1969)。OE では特に、分詞に由来する形容詞の比較形を表わす際に用いられたが、まれに一般の形容詞にも用いられた。

比較語は、比較級が mā (‘more’), bet (‘better’), swīþor (‘more’)、最上級が betst (‘best’), swīþsot (‘most’) と複数あり、劣勢比較では læs (‘less’) が用いられたが、用例は少ない。尚、これらは14世紀までに “more” と “most” に統一された。

例：gelæred - mā gelæred - betst gelæred
 (learned - more learned - most learned)

迂言的句比較が一旦英語の文法に現れると、次第に副詞の“more/most”が接尾辞比較の形容詞・副詞と結びつき、ハイブリッド型 (hybrid comparison) もしくは二重比較 (double comparison) と呼ばれる形も出現した (例：more quicker, most hardest)。さらに、接尾辞比較には、多くはないが、lesser, worsen, bestest のように不規則比較形を屈折させた特殊な二重比較形も出現している。よって、ME 期から初期現代英語期における比較形には、迂言比較形、接尾辞比較形、そして二重比較形の三種が存在したということである。

屈折比較は、ゲルマン語に特徴的な手段であり、英語においても古英語以来の伝統である。古英語では屈折比較しかなかったが、13世紀に初めて *ma, mo, mara, more, mast, most* などによる句比較が現れる。その起源は、古英語における *mā, bet, swīþor; betst, swīþost* などの副詞が動詞の分詞形に前置された構造にあるとされる。このように、英語には語尾に *-er, -est* を付す屈折比較と *more, most* を前置する迂言的句比較が競合してきた歴史があるのである。

7.3 形態素“~more”, “~most”の語源

寺澤 (1997) によると、“~more”の語は ME 期に当時すでに存在していた最上級形態素“~most”で終わる語に呼応して形成されたという。ただし、“furthermore”, “farthermore”, “innermore”のそれは Old Norse (Scandinavian) の“~meir”が基となって形成されたとのことである。

一方、語末形態素“~most”は下のような変遷を辿り、最終的には迂言的比較で使われる独立形態素“most”の影響を受けて確立した。

-mo- (← mā ← Germanic の mehr) + -ista (‘est’) ⇒ -mest (OE) ⇒ -most (PE)

英語史では、迂言的比較の“most”が語末形態素の“~most”より先に確立していたとされる点には注意が要る。つまり、-mest は、独立した副詞 most と語源的・形態的には関係がなく、古英語に見られた *inemest* (inmost), *norþmest* (northmost) などの接尾辞 *-mest* からの影響 (最上級を表わす *m* と *est* が結びついてできた二重最上級の語尾) で生まれたのである。しかし、結果的には、両者は混同されるに至る (堀田 2016)。

上述の英語史に基づく事実を鑑みると、リズムの衝突に依拠する本研究の仮説は否応なく修正を余儀なくされる。先述の通り、“~most”で終わる語がすべて語頭に強勢をもつという点を考慮すると、確かにリズムの衝突がこのタイプの語の誕生に大なり小なりの影

響を与えた可能性は否めない。しかし、次節で述べる通り、意味部門からの要請もあったと考えなくてはならない。

VIII. 何故 “~most” 型の形容詞・副詞が “~more” 型のものより多いのか

繰り返しになるが、付属形態素としての “~most” は主に位置・時・順序を示す形容詞・副詞・名詞の語尾に付いて、迂言的でもなく接尾辞的でもない最上級の形容詞・副詞を新規につくるわけだが、そこには意味的に固定された一つ概念が伴う。既知の有限空間において最も際立っているという概念である（大高・神谷 2018）。例えば、“the northernmost city” といえば、話者が言及した国で「最も北に位置する市」という意味で、また “the innermost chamber” といえば、わざわざ後に “of the house” を付けなくとも、話者がすでにある家について言及していれば、その中で「最も内側に位置する部屋」という意味なのである。つまり、このタイプの新しい最上級形式は、意味的な観点からも形成される必然性が高かったといえよう。経済原理に沿うからである。

一方、“~more” 型の形容詞・副詞は、意味的に固定した特別な概念に基づいて使われるわけではなく、強勢位置も一定していない。

Anymóre

Evermóre (文語：いつも、常に)

Forevermóre/forévermore (文語：永久に c.f. for évermore/for evermóre)

Fúrthermore/furthermóre

Névermore/nevermóre (文語：二度と～ない)

*Innermóre

換言すれば、“~more” 型の形容詞・副詞を含む文では、比較の対象は記述において決して省略できないのである。

例：*Sapporo is located more northern.

C.f. Sapporo is located more northern than Sendai in Japan.

IX. 結論

これまでの議論を踏まえると、“~most” を右端にもつ語の派生に関しては、次のように結論づけることができよう。

この型をもつ語が誕生したのは、まず第一に、意味的な観点からその必要性があったからである。この形式により、話者が言及する「時・場所などの固定空間で最も際立つ・上位にある」という意味が語彙レベルで表現できることとなり、経済原理に沿うからであ

る。そしてこの文法的変遷を側面から支えたのが、恐らくリズムの衝突であった。必ず語頭に強勢をもつ語彙にだけこの型が適用されたのはこの理由からであろう。

例：(OE) downmest ⇒ (ME/PE) downmost=the furthest down, towards the bottom

一方、“~more”を右端に付ける語はさほど発達しなかった (c.f. *northernmore)。比較級使用の場合は、必ず比較の対象に言及しなくてはならず、敢えて迂言的でもなく接尾辞的でもない比較表現を新規に生み出す必要がなかったためであろう。

参考文献

- 市河三喜・松浪有 著 1986年『古英語・中英語初歩』研究社出版
宇賀治正朋 2000年『英語史』開拓社
大高博美・神谷厚徳 (2018) 英語における方角形容詞・副詞の使い分け『英語教育』大修館書店 Vol. 66, No13, PP. 70-71.
堀田隆一 2016年『英語の「なぜ?」に答える はじめての英語史』研究社
Kytö, Merja (1996a). “‘The Best and Most Excellentest Way’: The Rivalling Forms of Adjective Comparison in Late Middle and Early Modern English”, *Words, Proceedings of an International Symposium, Lund, 25-26 August 1995* (Konferenser, 36), ed. by Jan Svartvik, 123-144, Stockholm: Kungl. Vitterhets Historie och Antikvitets Akademien.
國廣哲弥・堀内克明 1999年『プログレッシブ英語逆引き辞典』小学館
グリニス・チャントレル 2015年『オックスフォード英単語由来大辞典』冬風舎
寺澤芳雄 1997年 The Kenkyusha Dictionary of English Etymology 研究社
Pound, Louise (1901). *The Comparison of Adjectives in English in the XV and the XVI Century* (Anglistische Forschungen, 7.) Heidelberg: Carl Winter.
Mitchell, Bruce (1985). *Old English Syntax*. I. Oxford: Clarendon Press.
Mustanoja, T. F. (1969). *A Middle English Syntax*. Helsinki: Société Néophilologique.
水谷修 他 (編) 1999年『新版 日本語教育辞典』大修館書店

A Linguistic Exploration for the Development of Adjectives and Adverbs Ending with “most” in English

Hiromi OTAKA

English has two parallel systems of comparison, an inflectional one formed with suffixes “-er” for the comparative and “-est” for the superlative (e.g. *higher, highest*), with some irregular forms (e.g. *worse, less, most*), and a periphrastic (or syntactic) one formed with the adverbs “more” and “most” which are irregular comparatives of “many” and “much” (e.g. *more beautiful, most beautiful*), respectively. According to Mitchell (1985: 84-5), the periphrastic forms first appeared in the 13th century under the influence of Latin and French. They gained ground steadily after the 14th century until the beginning of the 16th century when they had become as frequent as they are today (Pound 1901: 19).

In addition to these above, there has been another type of comparison in regards to the superlative (northernmost, southernmost, etc.). This type of superlatives end in “most,” which is not the adverb “most” but the “most” that originates from a very old superlative ending *mest*. *Mest* is believed to have changed into “most” under the influence of the adverb “most.” With these adjectives ending with “most,” one or both of the other degrees (i.e. positive or comparative) are commonly lacking (e.g. *top* - ϕ - *topmost*, ϕ - *inner* - *innermost*).

This paper explores the reason as to why the last type of the superlative has developed through the Middle English. In order to pursue this exploration, a hypothesis is proposed as follows.

“Based on the fact that almost all the original adjectives/adverbs with the suffix “*most*” have the primary stress on the word-initial syllable (e.g. nórthern-most, hínder-most, bóttom-most), the new type of the superlative, which is neither inflectional nor peripheral, may have developed in order to avoid rhythm clash with the preceding adverb *most*. It has been well known among linguists that the rhythm clash can affect the syntax in the grammar as seen in the case of “half an hour” changed from “a half hour”.

An acoustic experiment with 12 sentences involving the comparatives and

superlatives uttered by 6 native English speakers was conducted by using a sound analyzer Praat. As a result, it turned out that both the adverbs “more” and “most” are given a stress as strong as the word-initial syllable of the following noun due to the prominence given. Thus, these results may bear out the validity of the aforementioned hypothesis. However, the loudness of “most” turned out to be not significantly greater than that of “-more,” failing to explain fully the reason as to why the number of adjectives/adverbs ending with the suffix *more* (5~6 words: e.g. furthermore, evermore) is significantly fewer than those with *-most* (44 words). This implies that there must be another reason other than the stress clash, which could be more influential. Therefore, a semantic approach is also taken in addition to an acoustic one.

In conclusion, it is claimed that the third type of superlatives, which is neither periphrastic nor inflectional, may have occurred during the Middle English period to meet the need from a semantic demand based on the Principle of Economy. This is because this type of superlative can help a sentence forgo the object of whole members to be compared. For example, from the sentence “This is the innermost chamber,” we can understand that the location of the room is compared with other rooms in the house he is referring to.